

# 『西行聞書』 歌注本文対観（下）

西 耕 生

本稿は、今治市河野美術館蔵『西行聞書』および国立公文書館内閣文庫蔵『玉集抄』それぞれの歌注箇所に関する本文の対観表である。『西行聞書』の被唱歌百首のうち歌番号1から50までの前半五十首を収めた上編に続き、この下編には残る51から100までの後半五十首の対観本文を収める。

## ▼西行聞書・玉集抄 歌注本文対観 凡例▲

〈本文の配置〉

一 今治市河野美術館蔵『西行聞書』後半の歌注箇所の本文を、国立公文書館内閣文庫蔵『玉集抄』前半のそれと対照させて、誤写・衍脱・傍記等をそのままに翻刻する。右に『玉集抄』本文を、左に『西行聞書』本文を配置する。「・（ナカグロ）」の表示は原則として対照される文字のないことを示す。なお『西行聞書』に採録されず『玉集抄』のみに見える三首の注釈箇所については、『玉集抄』の書面レイアウトに則しながら本文を太字で示した。

〈歌番号の表示〉

一 被注歌には検索の便宜上、歌末の丸括弧内に算用数字で歌番号を掲げる。百三首を採録する『玉集抄』に比べ、百首の採録にとどまる『西行聞書』には、『玉集抄』(51)(52)(92)にあたる三首を欠く。なお、「筏士よ」(玉集抄85・西行聞書83)の歌注に引かれる「和田の하라こき出てミレハ久方の」の歌は注解の一部と考えられるので、改行して注よりも字高を上げて記す両者の書記様態を保ちながら、番号は附さなかった。

〈翻刻の方針〉

一 原本をできるだけ忠実に翻刻するよう努めたが、読解の便宜上また印刷の都合上、以下のような方針を採った。

1. かなは原則として通行の字体に改めるが、原本に用いられた字形をそのまま保存したものもある。「二」「乃」「之」「ハ」「ミ」「メ」「屋」「井」などその一例である。

2. 漢字も原則として通行の字体に改めるが、原本に用いられた異体の字形をそのまま保存したものもある。「哥」「葉」「風」「船」「浪」「仲」「聲」「焮」「莓」などその一例である。

3. 補入記号の「。」・「・」や反復記号の「ゝ」「く」は原本のままに従い、表記を統一しない。

4. 原本の異文注記はそのまま翻刻するとともに、私に施した傍注は丸括弧で括り、区別して示す。例えば傍注の「(ママ)」は、「原文表記のママ」を意味する翻刻者による私注の謂である。

5. 『西行聞書』に異文注記とともに施された傍線は、原本に附されたものである。

6. 注意すべき書記様態について【】内に摘要を記した箇所がある。「改行字高ママ」などその一例である。

7. 『玉集抄』の被注歌に附された集付はそのまま歌の右方に掲げた。「万」「新古」「源氏」の三種にわたる。

8. 判読の困難な文字のうち、□で囲んだものは私に判読した文字を、■で示したものは判読できぬ文字を示す。

夏ふかきさくらかもとに水せきて心の程を風に見えぬる（玉集抄51）

此哥ハ涼しさをもとむる哥也夏ふかきとハあつ

き日の心也櫻かもとに水せくとハす、まんだめ

也心のほとを風に見えぬるとハ春花の時はいとひ

し風ふきける也いまあつき日にハしたへともふか

ぬとらむる心を風に見ゆるといへる心也

と・め<sup>な</sup>きのさきさかまかき白妙にむめつさ尾花まさかりに見ゆ（玉集抄52）  
【<sup>な</sup>・】は「な」ヲ補入スル記号

となめきとハ鳥の事也さきさかまかきとハ籬の

事也むめさお花とハすも、のこと也まさかりに

見ゆとハマ川さかりといふ心也

おく山に八重のさかもき引とてもうき世のことの猶やきこえん（53）

おく山にやへのさかもき引とてもうき世のことの猶やまさらん（51）

此・哥・ハ世をいとひ山ふかくすミてかよひちに八重のさかもきをひきてもなを世中の人やかよひきてうき世のこ  
このうさは世をいとひ山ふかく住・て通・日に八重のさかもきを引・て・なを世間の人やかよひ・てうき世のこ

とをきかせんと也  
とを聞・せんと也

吾をいとふ柴の庵のかけかねハ思・ひはつさハ猶・やしたハん (54)  
世をいとふ柴の庵のかけかねハおもひはつさハなをや忍・はん (52)

此・哥ハ世をすて、柴の戸にかきかけて人のとふことをいとひはてたる也しかれハ心にゆたんして思・ひはつさハ  
この哥ハよを捨て・柴の戸にかきかけて人のとふことをいとひはてたる也然・者心にゆたんしておもひはつさハ  
人をも猶・やしのハんといへる心也かけかねとハ戸にかくるかき也  
人をもなをやしのはんといへる心也かけかね・ハ戸にかくるかき也

打・きらし雪はふりつ、しかすかに霞たな引春ハ来にけり (55)  
うちきらし雪はふりつ、しかすかに霞棚・引春ハ来にけり (53)

うちきらしとハ雪の呉名也うちきらし雪・とハかさねこと葉也又一説ハたえくふると云儀もあり宗砌・連哥にう  
うちきらしとハ雪の呉名也うちきらしゆきとハかさね詞・也又一説にたえくふると云事もあり宗砌の連哥にう

ちきらしおちこち吹・て寒・・日に此・句ハたえくくに吹也  
ちきらしをちこちふきてさむき日にこの句ハたえくくに吹也

昔・・へや布さらしけむ山姫(マヤマ)の路(マ)ふりうつめ今朝の白雪 (56)

むかしへ屋布さらしけん山姫の跡ふりうつめけさの白雪 (54)

此・哥は古寺の雪と云題にて俊成卿よめる也ひえの山の根本をよめる也昔・・この山にハ人間おほく住て女の布さ  
この哥は古寺の雪と云題にて俊成卿よめり・ひえの山乃根本をよめり・むかしこの山に・人間おほく住と女(マ)の布さ  
らせ・るおほき所也傳教大師御建立の時・この山の人間をハはらハれけるにある女此・山に執・心・ふかくして死  
らしけるおほ支所也傳教大師御建立のときこの山乃人・を・はらひ・けるに有・女この山にせうしんふかくして死  
にけりその女のれいこんともすれは此・山にあらハれけることをよめるあとふりうつめとハ此・女のしうしんをう  
にけりその女のれいこんともすれハこの山にあらはれけることをよめりあとふりうつめとハこの女のしうしん・う

つめといへる也

つめ・・・也

よしの川きしのやまふき手折とてかた舟にこそわれハ乗けれ (57)

よしの河きしの山・吹・手折とてかた船にこそ我ハのりけれ (55)

此・哥ハよし野河のきしのやまふきをおらんとて舟の一方のふなハたにのれる也それをかた舟とハいへる也・舟・この哥はよしの川のきしの歎・冬・おらんとて船・一方の船・はたにのれる也それをかた船とハ云・なりふね

のかたのりともよめる也・

のかたのりともよめるなり

吉・野河いはほのさくら散・ぬれハ天・の羽衣なつるとそ見る (58)

よしの山岩・をの桜・ちりぬれハあまの羽衣なつるとそみる (56)

此哥ハさくらのちりたるを衣にたとへたる哥也是をあまの羽衣なつるかるとよめる心ハ盤石劫とて天人の衣に  
此哥はさくらのちりたるを衣にたとへる哥也是をあまのは衣なつる・とよめる心也枚田石劫とて天人の衣に

錢の字一の比(ママ)・さなる衣をきて石のひろさ四十里長さ四十里の石を三年に一度つゝくたして此・衣にてなて・つ  
錢字イの・一のかるさなる衣をきて石の廣・さ四十里長さ四十里の石を三年に一度つゝくたしてこの衣にてなてられつ(ママ)

くす・を・はんしやくこうの一こうといへる也その古事を今吉・野山の櫻・のいはほにちりか、りたるを天の羽  
くせるをはんしやくこう・一劫・と云・る也その古事を今よしの山乃さくら・岩・尾にちり(マツ)けりたるを天を・は  
衣のなつるかたとへてよめる也・ことにこの山にハ昔・天人のくたり・ける屋まとかや  
衣のなつるかたとへてよめるなりことにこの山にハむかし天人のくたりし給ひける・とかや

忘・草かれもやするとつれもなき人の心に霜を、かなん(59)

わすれ草枯・もやするとつれもなき人の心に霜を置・なん(57)

わすれ草とハ萱草とかけり我をわする、くさ人の心にあるゆへにつれなければ人の心に霜・をけと下知する心也を  
忘・草とは萱草とかけり我をわする、くさ人の心にある故・につれなければ人の心に霜ををけと下知する心也を  
かなんと・をけなんと下知したるてには也惣而なんといふてには・大事もおほくハ下知したる哥・おほし屋とりか  
かなんとはをけなんと・云・てにはの大事もおほくは下知したることおほしやとりか  
らなんとといふもかれなんといひたるてには也  
らなんと云・もかれなんと云・てには也

櫻・花散・は散・なん散らすとて故・郷人のきても見なくに (60)

さくら花ちらハちらなんちらすとてふる里人のきてもミなくに (58)

此・哥ハ僧正遍昭のならの都・<sup>(ママ)</sup>をちかく住給へりけるあんしつの櫻・<sup>(ママ)</sup>をよミ給へるとなむ櫻花とよひいたして  
この哥は僧正遍昭のならのミやこ・ちかく住給へ・る庵・室・のさくら・よみ給へる也・桜花とよみ出ひ・して

ちるへき物ならはちれといふ心を散・ハちらなむとよめりちらなむハちれなんといふ下知也・故郷人のきてもミな

ちるへ支物ならハちれと云・心をちらはちらなんとよめりちらなむはちれなんと云・下知なり古里人のきてもミな

くにとハならのミやこ人なども問・来て見ることもなけれハちれといへる坎・都・の跡をハ故・郷・といへる也  
くにとハならのミやこ人・とひきてみる事・もなければちれといへる心也ミやこ乃跡をハふるさとと云・也

やまふきの花色衣ぬしやたれとへとこたへぬ口・なしにして (61)

やまふきの花色衣主・は誰・とへとこたへすくちなしにして (59)

やまふきの花色・とハ赤衣也五位・人の衣也其・人をたれそととひけれとこたへさりけれハくちなしにしてとよ  
やまふきの花いろ衣とハ赤色也五位の人乃衣也その人をたれそととひけれ・ハくちなしにしてとよ

める也やまふきくちなし同じ色なれハ也・・・  
めり・山・吹・くちなし同じ色なれハ也と云り

柏木に椎のしつ枝を折そへて左右・さまでハふしおかむらん (62)  
柏木に椎のしつ枝を折添・てさゆふさまでやふしをかむらん (60)

此・哥はある人右衛門の官・・と四位と二の官をゆるされてそのよろこひによミけるとなむ申つたへたる柏木とよ  
この哥ハある人左衛門のくわんと四位の二・官をゆるされ・其・悦・・によみけるとなん申傳・・たり柏木と讀  
めるハ右衛門の事・椎をよめるハ四位の事也しつえとハ下・枝といふ儀也・さゆふとハひとりミきりの袖をのへて  
・るは左衛門の事也椎をよめるは四位・・也し川枝・は下の枝と云・儀なりさゆふとハ左・・右・・の袖をのへて  
まひのことくさツくとのへておかむ事・也物のうれしきによるこふ時・におかむ也・  
舞・乃ことくさつくとこのへておかむこと也物・うれしきハよろこふときにおかむなり

かつらきや豊・良の寺の西なるや糸の葉井をくむ白玉しつく (63)  
かつらきやとよらの寺の物なれや糸(ママ)のは井ををくむ白玉しつく (61)



此・哥をハ先達もさまざまの心を付てさたし侍りある人申給・しハ時は秋のころ物かなしかりける何事といハんと  
この哥をハ先達もさまざまの心を付てさたし侍りある人申給ひしハ・・・焮の比・物悲・しかりける何事といハんと  
すれハとりたてたる事・はなし心をとりにたしてあらハに見る物ならハ鹿なく野へのことくならんと也・・・・  
すれはとりたてたること葉なし心を取・出・してあらハにみる物ならハ鹿啼・野へのことく・・・となんとさたし  
・・・・・  
給ひ候先達一人のせつかく乃ことし

伊にしへの光尋・・し跡・やこれ深雪さえたる志賀の明更・ (66)  
古・・・の光たつねしあとや是・深雪きやさえたるしかの明ほの (64)

此・哥・志賀寺の根本也・この寺つくるへき所にあたり・光のさしけれハ尋・・ゆきしに仙人ありけり此・所をハ  
この哥ハしか寺の根本なりこの寺作・るへ支所にあたりて光のさしけれハたつね行・しに山人ありけりこの所をハ  
いかにと問・けれハ古仙靈圃伏藏地閑と波長良山と云其・後・こ、に伽藍・をたて  
いかにととひけれハ古仙靈圃伏藏地楽々波長良山と云その後まことに可ら下んいたつ  
て志賀寺崇福寺  
【て】擦消上書】てしか寺崇福・

と号す・  
 と学深る也

鈴舟をよせくるなみにをとろきて須まのうへ野にき、す鳴也 (67)  
 鈴船をよせくる波・におとろきてすまの上・野に雉子鳴なり (65)

此・哥ハ王孫たれにても須戸・・へうつらせ給ひける時・の事坎す、舟とは王孫のめす舟・にハ鈴・をたつる也  
 この哥は王孫統イ・にてもすまのうらへうつらせ給ひけるときの事也す、船とは王孫統イの渡るふねにハす、をたつる也  
 須戸のうへ野とハ海・ちかく野ある也雉子のおとろくとハ鷹のす、かとおとろく也・  
 すま乃うへ野とはうみちかく野有・也雉・のをとろくとは鷹のす、に・おとろくなり

かの見ゆるきしへにたてるそか菊のしけミさゑたの色にてこらさ (68)  
 かのミゆるきしへふイにたてるそか菊のしけミさゑたの色にてふらさ (66)

かのミゆるとハきくをさしてかくミゆると云心・そか菊とハ花のりんのちいさきとなむしけミさゑたとハえたのし  
 ミのみゆるとは菊・をさしてか・ミゆると云心也そか菊とハ花のりんのちいさきとなんしけミさゑたとは枝・乃し

けき心・・也てこらさとハてうあひしたる心也・  
けきこゝろ也てふらさととはてうあひしたる事なり

誰としもしらぬわかれのかなしきハ松・浦の奥に出る舟人 (69)  
誰としもしらぬわかれの悲・し支はまつらの奥を出る船人 (67)

此・哥・ハもろこしへ行舟の事也もろこし舟ハ松浦よりいつる也うたのほんいハもろこしへ行・かすくゝのりたる  
このうたはもろこしへ行船の事也もろこし船ハ松浦より出・る也哥・乃本・意ハもろこしへ行人かすくゝのりたれ  
人をハ誰としもしらね共・我國をはなれて千里のはたうをしのきてしらぬさかひへおもむく事ハまことにかへりかた  
は・・たれ共しらねとも我國をはなれて千里のはたふをしのきてしらぬさかいへおもむく事ハまことにかへりかた  
き旅なれはかやうによめる也  
き旅なれはかやうによめり・

いさや子らハや日・本へ大とものミつのはま松まち恋ぬらん (70)  
いさやこらはや日の本に大とものミ川のはま松まつ恋ぬらむしイ無 (68)

此・哥・ハあふミの國の人山上憶良といひしか入唐してもろこしにてよめる哥也・いさやこらとは我かつれたる人  
 このうたハあふミの国乃人山上憶良といひしか入唐してもろこしにてよめる哥なりいさやこらとハ我・つれたる人  
 の事也あなちまことの子にあらね共・諸人の事を子といへる也子者男子の通稱也といへる心也大・友のミつのは  
 の事也あなちまことの子にあらねとも諸人乃事を子といへる也子ハ男子の通稱也と云・る・也おほと（つこ）のミつのは  
 ま・・とハあふミのミつうミのうちにある一首のほんいはミつのはま松もわれをそまち恋・ぬらん・いさや帰・ら  
 ・ま川とハあふミの湖・・の内・にあり一首の本・意ハミつ乃はま松も我・をそ・・こひぬらんといさやかへら  
 んと云心也無心の松などの人をまつといふ事はほんせつあり三躰詩に三蔵西域（よき）にかへるといふ詩二 広頂・松とて三  
 んと云心也無心の松などの人をま川と云・事・本・跡・有・三躰詩に三蔵西域（よき）にかへると云・詩に摩頂の松とて三  
 蔵のたうとにて住給ひし坊の庭に松をうへて愛・しいたたきをなて、手なれ給へる木也三蔵天竺へ帰・り給・し  
 蔵の唐土・にて住給ひし坊の庭に松をうへてあひしいた、きをなて、・なれ給へる木也三蔵天竺へかへり給ひし後  
 ち此・松天ちくのかたへなひきて三蔵のなこりをしたひしと三躰詩のちうに見えたりかやうの事・を古事として三  
 ・この松天ちくの方・へなひきて三蔵の名残・をしたひしと三躰詩乃ちうに見えたりかやうのことを古事としてミ

・のはま松まちこひぬらんともよめる坎・  
川の濱・松待・恋・ぬらんともよめるなり

弓といへはしな、き物をあつさゆミま弓・つき弓しなこそ・有けれ (71)  
弓といへハしな、き物を梓・・弓・まゆミつき弓しなこそハ有けれ (69)

此・哥はさいはらの哥也弓といへはしな、きと・物をいふにえむのこと葉なくしてさしいたしてその物をそのま、  
この哥ハさいはらの哥也弓といへはしな、きとハ物をいふにえんのこと葉なくしてさし出・してその物をそのま、  
いふは物にしな、きといへりあつさ弓・又まゆミつき弓・など、うへに字を、きていふは詞・・のしなあれハかく  
いふは物に品・なきといへりあつさゆミ又まゆミつきゆミなど、うへに字を置・ていふハこと葉のしなあれハかく  
よめりさいはらとハ内裏にてかくらさいはらとてうたはる、物なり弓うたふとハ神祇也かくらもさいはらも神祇也  
よめりさいはらとハ内裏にて神楽・さひはらとてうたはる、物也・弓うたふ・・神祇也かくら・さいはらも神祇也  
田中の井と梓弓鷹の子きりくす高砂からかミ石河力なしかへるあけまき我心(マ)此・ほかうたひ物をしるしたるさう  
田中・井と梓弓鷹・子きりくす高砂からかミ石川力なしかへるあけまき我門この外・うたひ物・しるしたるさう

し侍りこゝにかけるは先筆にうかふまゝ、かき侍り  
し侍りこゝに書ゝハ先筆にうかふまゝ、かき侍り

御さふらひミかさと申・ミヤき野の木の下露ハ雨にまされり (72)  
ミさふらひみかさと申せミヤ木の、この下露ハ雨にまされり (70)

此・哥ハかつらきの大君・ミちのくに、くたり給し時・宮・城野・遊覧・によめる坎みさふらひと・御ともの人ミ  
この哥は葛・・城の大君のミちのく・へ下・・給ふときミヤきの、遊らんによめるか御さふらひとハ御友の人く

坎木の下露と八年へたる萩の大木になるそのかけ・事と申つたへたり  
ハ木の下露と八年へたる萩の大木になるその陰・の事と申侍る也・  
カキ サマ

行水に数・かくよりもはかなきハおもハぬ人をおもふ也けり (73)  
行水にかすかくよりもはかなきハおもハぬ人をおもふ也けり (71)

此・哥ハわれを思・ハぬ人をおもふハさなから水に繪をかけるかことしと也かすかくとハ繪かけること也又一  
この哥ハ我・をおもハぬ人をおもふハさなから水に繪・かけるかことしと也かすかくとハ繪かける事・也又一説  
サマ

にハある人の女をこひけるにこ・もと・なる・水・百夜きたりてくる夜のかすをかけ百夜にミちたらん夜あはむと  
に・ある人・女を恋・けるにこ・もとに流るゝ水に百夜きたり・・・・・

いひける程に百夜きたりてかすをかく百夜の時・女水を見れハあとなしさて百夜数・書・けるハいつハリ・とてあ  
・・・・・てかすをかく百夜・とき・水をミればあとなしさて百夜かすかきけるはい川ハリそとてあ

はさりけりこれは女のおとこを思・ハぬ故のハかり事・也いつれにもはかなき謂・・也  
ハさりける是・ハ女のおとこをおもハぬ故のハかりこと也いつれにもはかなき(ママ)われ也

とふさたてあしから山に舟・木きる木に切・かけてあたら舟・木を (74)

とふさたてあしから山にふな木きる木にきりたてつあたらふな木を (72)

此・哥ハ恋・の哥也とふさたてと・山庄の木を切・にハこと木の枝をおりて・ちにさしていま切・木の代に山・神  
この哥ハこひの哥也とふさたてとハ山鳥の木をきるにハこときの枝をおりてつちにさしていまきる木の代に山の神  
にたてまつる也それをとふさといふ也あしからやまとハ西國にある名所也此・山にてハ舟・木をきるにこと木にき  
にたてまつる也それをとふさと云・也あしからやまとは西國にある名所也この山にてハふな木をきるにこと木にき

りかけ・たる木をハ舟木にハなさぬ也舟はさハリなく行をほんいとす物也今こゝに舟・になすへき木をこと木に  
 りかけてある木を・船木にハなさぬ也船はさハリなく行を本・意とする物也今爰・にふねになすへき木をこと木に  
 きりかけたるハさハリあることハリなれはすつる也しかればあたら舟木をとよめり此・哥の恋なる心ハおとこ女を  
 きりかけたるハさハリあることハリなれハ捨・る也しかれハあたら船木をとよめりこの哥の恋なる心はおとこ女を  
 わかきよりやくそくして人・なりける時・おとこのかたよりよハひければこと人によはひとられぬ我物にならぬを  
 若・・より約・束・して人と成・けると支おとこのかたよりよハひけれハこと人によはい(マ、マ)とられぬ我物にならぬを  
 舟・木こときにきりかけてさハリあるにたとふる也とふ・に三・のしなあり一・にハ木のえた一にハ木をきるこ川  
 ふな木こ木イ。にきりかけてさはりあるにたとふる也とふさにミつのしな有・一ツには木の枝・二にハ木・きる・

はと云物一・にハ木のこす糸をも云也此哥のあしから山の事はこねにちかきあしからにあらす  
 ・・・三つにハ木のこす糸をも云也此哥のあしから山の事はこねにちかきあしからにあらす

橘の実さへ花さへその葉さへ枝に霜をけとましときは木 (75)  
 橘の実さへ花さへその葉さへ枝に霜をけとまし常盤のイ。木 (73)

此・哥はかつらきの大・君・の哥・也・たち花をハほめてよめり霜はをけとも花もみも枝もいよくましてしける  
この哥ハかつらきのおほきミのうたなり橘・・・のほめてよめり霜はをけとも花も実も枝もいよくましてしける  
心・・也此【玉集抄改行字高嵩シ】・時・御父より大・君・・橘（マ）の性を給・・て後にハ橘・・・の諸・兄・卿と申せし也これ橘・・・氏・  
こゝろ也このときは父よりおほきみへ橘の庄を給ハリて後にはたちはなのもろえの卿と申せし也・・たちはなうち  
のハしめ也・  
のはしめなり

薄・氷あはにむすへるひもなれハかさす日影にゆるふ也けり (76)  
うす氷あはにむすへるひもなれハかさす日影にゆるふ也けり (74)

此哥ハ内裏のかくらの時の事也うす氷あはにむすへるとハ内裏のかくらの時・の襲・・束・也しろき物也それを  
此哥ハ内裏乃神楽のときの哥也うす氷あハにむすへるとは大内のかくらのとき・しやうそくハしろき・也それを

薄・氷とよめりあはにむすふひもとはきぬのひもをゆるくくとむすひたる也・かさす日影とハ奥・山にあるこけを  
うす氷によめりあはに結・・ひもとハ衣・のひもをゆるくとむすひたるなりかさす日影とハおく山にある莓・を

とりて五色の糸・にてくさりつ、けてかくらにかくる・也是を日影・糸・とも・云也氷ハ日影にあたりてとくる  
 とり・五色のいとにてくさり・・・てかくらにかくる物也・・日影のいと、も是を云也氷は日影にあたりてとくる  
 物なれハかくたとへてよめり日影にゆるふとハまひ人の袖を返・しまふによりてきぬのひものゆるくなるを云・也  
 物なれハ・たとへてよめり日影にゆるふとは舞・人の袖をかへし給ふによりて衣・のひものゆるくなるをいふ也

花ぞ見る道の芝草ふミ分てよし野、宮・の春の明更・ (77)

花ぞみる道の柴草ふみ分てよしの、ミヤの春の明ほの (75)

花ぞ見るとハ花をそミるといふ心也よし野、宮・とハむかしよし野に住給・ける御門ましくけり  
 花ぞミるとは花をそミると云・心也よしの、ミヤとはむかしよし野に住給ひける御門有・・・

と、まらぬ心ぞ見えん帰る鴈花のさかりを人にかたるな (78)

とくましぬ心ヒイライぞミえむ帰る鴈花のさかりを人に語・るな (76)

此・哥ハ鴈の故・郷・にかへりてこ、もとの花のさかりに旅・たちたるなど、かたらハ  
 この哥は・・ふるさとに帰・りて爰・元・の花乃さかりをたひたちたるなど、かたらハ





炭・をやくを野の山邊の夕・風にかたなひきなるさまんもらん・ (82)  
すみをやくおのゝ山へのゆふ風にかたなひきなるさまんもらんや<sup>1</sup> (80)

すミかまのをのとハ炭やく所也又名所にもいひならハせりさまんもらんとハ煙の呉名也  
すみかまのをのとハすミ焼所也又名所にもいひならハせりさまんもらんとハ煙の呉名也

歴山のふもとのをたにはむからすなひきし御代のはしめ也ける (83)

曆山の麓・・の小田に鳴・からすなひきし御代のはしめ成けり (81)

舜の御事也舜の平氏たりし時・其・比天下日てりして万民うへしぬにこのれきやまのふもとにつくりし・田はかり  
舜の御事也舜・平氏な・しときそ乃比天下日照・して万民うへ死ぬにこの曆・山・のふもとをつくりし御田ハかり

まんさくたりしによりこのあたりの人たすかりき堯・王このことを聞及・・わか世を舜にゆつりたりし也堯舜二代  
まんさくせ・しによりこのあたりの人たすかりき堯の王この事・を聞および我・代を舜にゆつりたりし也堯舜二代

天下おさまりしことをなひきし御代のはしめと讀・る也・

天下治・・し事・をなひきし御代乃はしめとよめりけり

いさ、らハ袖をハラひて立さらん露にやとれる秋の夕暮(84)

いささらハ袖をハラひて立さらん露にやとれる秋の夕暮(82)

秋の夕暮のあハれをかんすれハ必・・・袖に露を、けり然ハ此・秋の夕くれハ露にやとれる物也けるに袖をハラハ  
秋の夕暮の哀・・をかんすれはかならず袖に露をける然者この秋の夕暮・ハ露にやとれる物也けるに袖をハラハ

、秋のゆふくれ・うさハ身にとまらしと也いささらハと・秋のゆふ暮といふ物は露に屋とれるそとりやうけ・・し

、秋の夕・暮・乃憂・ハ身にとまらしと也いささらはとハ秋乃ゆふ暮と云・物ハ露にやとれるそとりやうしやうし

ていへる五文字なり

ていへる五文字なり

筏士よまでこと、ハむ水上ハ五十日斗ふく山の嵐・・そ(85)

筏士よまで事・とハん水上ハいか・斗吹・山のあらしそ(83)

此・哥ハ紅葉浮水と云題の哥也大井河のほとりにての哥とかや所からかやうにハよめる秋嵐・・山の紅葉・など此  
この哥ハ紅葉浮水と云題の哥也大井河のほとりにての哥とかや所からかやうにハよめり・あらし山のもみちなど・

大・川にちりうきてなかる、を見て水・上ハいかハかり嵐・のふけはかくのことく紅葉・ハなかる、そといかた  
大井河にうきちりてなかる、をミテ水乃上ハいか斗・あらしのふけはかく・もみち・なかる、そといかた  
しにとふ心・也連哥などにハかやうにハあるましき也題の字を云・出さずしてハせぬ物・也舟など、いハねとも  
しにとふこ、ろ也連哥などにハかやうにハあるましき也題の字をいひ出さずしてハせぬもの也舩など、いはねとも

こき出てなど・よめる也・

こき出てなど、よめるなり

和田の原・こきいて、ミレハ久かたの雲ゐにかゝる沖津白波【改行字高ママ】

和田の原にこき出て・ミレハ久方・の……【改行字高ママ】

など、よめるハ舟といふ字なき也

など、よめるも舩といふ字なき也

殿・守のともものミやつこ心あらは此春斗・朝きよめすな(86)

との守のともものミヤ川こ心あらハ此春ハかり朝清・めすな(84)

殿・もりのとものミやつことハ内裏にて朝ことに庭をはく人也この春ハかり朝庭をきよむるなどはいかにし・てなとのもりのとものミやつことハ内裏にて朝ことに庭をはく人也この春斗・朝庭をきよむるなどはいかにとしてなれば此・哥の題に庭上落花(つゞ)を云事をよめれハ也庭に花のちりしきたらんをハはきすてん事・ハ無心なれハ朝きよれハこの哥・題に庭上落花と云事をよめる・也庭に花のちりしきたらんを・拂きすてんことハ無心なれハ朝きよめすなとよめり是も花ともいはて・花をよめりまへのいかたしの哥と同前也  
めすなとよめり是も花ともいはねとも花を讀・りまへ乃いかた・の哥と同・也

鳥の聲霞・の色をしるへにて面影にはふ春の山ふミ (87)  
鳥の聲かすミの色をしるへにて面影句・ふ春の山ふミ (85)

此・哥ハ山路の花といふことをよめり哥の心ハ山路を行し時に鳥のなく・霞・の色こきかたをミて花のあるかこの哥ハ山路の花と云・事・をよめり哥乃心はやまちを行・時に鳥の鳴・にかすミの色こきかたをみて花のあるかと思・ひ侍・也山ふ見とは山行事を云也定家卿哥也  
とおもひ侍る也山ふみ・ハ山行事を云也定家卿哥也

忘・ぬやさハ忘・けり我心夢になせとそ云・て別し (88)  
わすれぬやさハ忘れぬや我心夢になせとそいひて別し (86)

この哥・ハ一夜ハかり逢・へき人にあひてわかる、時人のいはくあふ事・も此・ま、なるへし今夜乃あふせを夢  
このうたハ一夜ハかりあふへき人にあひて別・るとき人のい(わ)くあふこともこのま、なるへ支今夜の會・せを夢  
に忘よといひけり我も忘・んとりやうしやうして程・なく恋・しく也けれハよめるなり夢になせと・いひし  
に・・・・・わすれんと領・・賞・・してほとなくこひしく成けれハよめる也・夢・なせと(い)ハいひし

事をハ忘・れ逢ミし事をは忘・れぬ也さハとハされハと云心也  
事・はわすれ相ミし事を・わすれぬ也さはとハされはと云心也

誰・ためのにしきなれはか秋霧のさほの山邊を立かくすらん (89)  
たかためのにしきなれはか秋霧の(た)棹の山へを立かくすらん (87)

さほ・山は紅葉・のおもしろき所也我見にゆけは霧・のたちこめて見せぬハ誰に見せんかためのにしきなるらんと  
さほの山はもみちのをもしろき所也我見に行・はきりのたちこめてミせぬハ誰にミせんかためのにしきなるらんと

よめり

よめり

山櫻我・見にくれは春霞・嶺にも尾にも立かくしつ、(90)

山桜わかみにくれは春かすミ岑にも尾にも立かくしつ、(88)

都・なる花はさまく世にさかへたる人のミ見侍れはうき身はよりつきへす山・中の花を心やすく見むとてゆけ  
ミやこなる花ハさまく世にさかへたる人のミミ侍・ハうき身はよりつきえす山の中乃花を心やすく見んとて行・

ハミねにもおにも・たちかくしてミせぬハ霞・さへうき身をはいとひけるやと侘たる哥也・まことにあハれ  
はミねにも尾にもかすみ立・かくしてミせぬハかすみさへうき身をハいらひけるやと侘たる哥なりまことに哀・

ふかき哥也

ふかき哥也

榊葉の香をかくハシミとめくれハ八十氏人そまとひせりける (91)

榊葉の香はかくわしきとミくれハ八十氏人そまとひしにけり (89)

此・哥ハ賀茂の祭の時の哥也榊・葉のかをかくはしミとハ香をかふハしきと云心也とめくれハとハかうハしミをこの哥ハかもの祭の・哥也さか木葉のかをかくわしミとハかをかふはしきと云心也とみくれは・かふはしきを  
もとめくれハと云心也八十氏人とはた、諸人と云心也日本國中にハ人の氏・八十あり八十氏といへは日本の諸人もとめくれハと云心也八十氏人とハた、諸人と云心也日本國・には人のうちは八十あり八十氏といへハ日本の・

といふ心也かもの神事にハ諸人のあつまれる事をいへり  
・・・・・諸人の集・れる事を云・り

あし引の山のまにくたふれたるから木ハひとりふせる也けり（玉集抄92）

あし引の山のまにくハ山にかれたる木の心のまゝに

かれたるを云也まにくとハ随意とかけりから木

とハからき也から木ハ日とりふせる也とハウきと云心也

からきめを見るなど、いふもうきめを見るときといふ

心也此哥にかれ木をからきとよめるハウきとい

はんためによそへていへること葉也

世間のうけくにあきぬおくやまの木・葉にふれる雪やけなまし (93)  
 世中のうけくにあきぬおく山・この葉に降・る雪やけなまし (90)

うけくとハ世中のうき也けくハつけ字也たとへハ露・けくなど、いふけく也木葉にふれる雪とハ行・といふかたへ  
 うけくとハ世中のうき也けくハ付・字也たとへはつゆけくなど、云・けく也木はにふれる雪とはゆくと云・かたへ  
 とりたることは也哥の心ハ世の中のうきにあきぬれハおくやまへゆきて木のはの雪のことくきえなましといふ心也  
 とりたること葉也哥の心は世・中のうきにあきぬれはおく山・へゆきてこのはの雪のことくきへなましと云・心也

太山路を行くきけは物すこくた、ひとりなく日もす鳥かな (94)  
 ミ山路を行く聞・は物すこくた、日とりなく日もす鳥哉・ (91)

ひもすとり・ハからすの事也ミやまちをゆけハ鳥・・の日とりなく物すこき也  
 ひもすとりとハからすの事也ミやまちを行・はからす・日とり鳴・はすこき也

しとミ山おろすあらしのはけしきにかせきの聲そ遠さかりゆく (95)  
 しとミ山をろす嵐・・のはけしきにかせきの聲そ遠さかり行・ (92)

しとミ山ハ名所なる・を家のたて物のしとミにしなしてよミ侍りしとミ・ハおろす物なれハおろすあらしとよめりしとみ山は名所也それを家のたて物のしとみにしなしてよミ侍りしとみとはおろす物なれハおろす嵐・・とよめりかせきといふものもしとミをあくるにやとす木也かきのやうにまけてつくりてうへ・・さけたる木也それを山・にかせきといふ物・もしとミを<sup>をイ</sup>あくるにやとす木也鉤・のやうにまけて作・・てうへよりさけたる木也<sup>をイ</sup>それをやまにすむかせきにとりなしてよめりかせきとハしかの事也  
住・かせきにとりなしてよめりかせきとは鹿のこと也

氣比の海の日和よくあらしかりこものミたれて見ゆる漣・のつりふね (96)  
氣ひの海の日はよくあらしかりこもの乱・・てミゆる海士の釣・舟・ (93)

氣いのうミハ北・國・也<sup>(マセ)</sup>にハよくあらしとハ日・やハラきて・海・のおもてのとかにあるらしかりこものトハミ氣ひのうミハほつこく也 日はよくあらしとハ日ハやハラかにてうミのおもてのとかにあるらしかりこも・とハ乱たれたる草也あまのつりふねのミたる、とハおほくこきつらなるを舟のミたる、とハいへり日和よくあらしとハ・・たる草也海士乃釣・ふねのミたる、とハおほくこきつ、氣たるを云なり・・・・・日はよくあらしとハ

いつくのうみにても云へき也  
 い川くの海・にても云へき也

大空におほふ斗の袖もかな風・の心に花をまかせし (97)  
 大空におほふ計の袖も哉・かせの心に花をまかせし (94)

此・哥・ハ花にふく風をいとひかねてよめり天におほふほと・の袖たにもあらハ風・をふせかんと也  
 このうたハ花・吹かせをいとひ・てよめり空におほふハかりの袖たにもあらハかせをふせかんと也

春の花かせの心のま、ならハむくいある世を・ちる紅葉哉・ (98)  
 春の花かせの心のま、ならハむくひある世をおつる木葉かな (95)

春の花を風・にちらされて花をおしむ人の心に風・にたいして世にハむくみある物也さり共・花をちらしたると  
 春の花をかせにちらされて花をおしむ人の心にかせにたひして世にハむくひ有・物也さりととも花をちらしたると  
 かのむくるハ一たひ風・にありなんと思・ひふくミてまつ所に秋きたりて紅葉・をもちらすをみてさては世にむ  
 かのむくひは一度・かせにありなんとおもひふくみてまつ所に秋きたりてもみちをもちらすをミてさてハ世にむ

くるといふ事・ハなき物也と花・もミちのちるうへより世間の空なることをくはんしたる哥也  
くひと云・ものハなき物也とはなもみちのちるうへより世間の空成・事・をくわんしたる哥也

わきも子かぬくたれかミを猿・澤の池の玉もとミるそかなしき (99)  
わきも子かぬくたれ髪・をさる澤の池の玉もとみるそ悲・敷・ (96)

此・哥は君・をうらミたてまつりてうねめと云へる女かすかのさるさハのいけに身をなけ侍りけるを・  
この哥ハきみをうらみ奉・  
て采・女と云・女かすかのさるさハの池・に身をなけ侍りけるをうしなへる

かはねたと引あけて君・のよミたまへるとなむ此・哥ハかつらきの大・君なるへし  
かはねを・引上・てきミのよミ給・へるとなんこの哥はかつらきの御きミなり・

初深雪ふりにけらしなあらち山こしの旅人そりにのるまで (100)  
初ミ雪降・にけらしなあらち山こしの旅人そりにのりける (97)

あらちやま・北國也はつミ雪とハ初・  
てふる雪のふかきをいふ也そりとハ雪の時・のりてつなを付て引物也  
あらち山・とは北國也初ミゆきとハはしめて降・雪のふかきを云・也そりとハ雪のときのりてつるを付て引物也

からきなど、いへるたくひの物なる坎  
 から木など、いへる物のたくひなる也

忘・なむ世にも北路(ママ)のかへる山いつはた人にあハんとすらん (101)  
 忘れなむよにも心・の帰・る山いつはた人にあはんとすらん (98)

是は伊勢か哥とかやあひ思ひけるおとこ越前・になりてゑちせんへくたりける此・國にかへるやまと云名所あり  
 是はいせか哥とかや相おもひけるおとこ越前守に成・て越・前・へくたりけるこ乃國にかへる山・と云山・あり  
 女のおもふやう此國にハ帰る山といふ山ありおとこくたりたらんにハやかて都へかへりなむとたのもしく思・ひ  
 ・・・・・おとこ下・りたらん・・・・・とたのもしくおもひ

けるかさハなくして越前にてむなしくなりぬ此・おとこの事を忘・すおもふともいつはたあハんいさ忘・なん  
 けるかさハなくして越前にてむなしく成・ぬこのおとこの事・わすれすおもへともいつはたあハんいさわすれなん  
 とよめり世にもこしちとハよにくくと物をふかくなけきたる心・世世にもかく・本のあるハわろしかへる山・  
 とよめり世にも心・とハよにくくと物・ふかくなけきたるこ、ろ也よにもかくと本のあるはわろしかへる山の

ちかくにいつはたの庄とてありそれを詞・のいつハたと庄のいつはたとをかけていへり忘れなんとハわすれへぬ  
ちかくにいつはたの庄とてありそれをこと葉のい川はたと庄のい川はたと云かけて云・り・・・・わすれえぬ  
もの、いひこと也  
人の・いひ事・也

君か代はしら雲かゝるつくは山峯・のつゝきの海となるまで (102)  
君か代は白・雲かゝる筑・波山ミね乃つゝきの測となるまで (99)

いハひの哥也ミねのうミとならんことハさてもいかほと久・・あらん又ハミねの海になるか・とハあるましき  
いはひの哥也ミねの測・にならんことハさてもいかほとひさしくあらん又ハミねの海にならんことハあるましき

・なれは・君・か世の久・しからんことをたとへていへりたとへは世上に日月は地におつる共・など、いへるに  
ことなれハ也きミか代のひさしからん・にたとへていへりたとへは世上に日月ハちに落・ともなど・云・る・

おなし・  
をなし心也

ふかきせのそこの水くつと成ぬ共・扇・の風・ハ吹もつたへよ (103)  
 ふかき瀬のそこのミく川と成ぬともあふきのかせハ吹もつたへよ (100)

これハ飛鳥井の君・つくしへくたりける時・舟・のうち・扇にかきてをきて舟より海・に身をなけし時  
 是・は飛鳥井のきミつくしへ下・けるときの御事也ふねのうちにて扇に書・てをきて・うミへ身をなけし時  
 の哥也くハしくハさころもの物・語・に見えたり  
 乃哥也くはしくハさころものかたりにみえ侍り

〈以上〉

「附記」末筆ながら、貴重な所蔵資料の閲覧調査および翻刻掲載を許可せられた今治市河野美術館、内閣文庫  
 所蔵資料の複写物交付について許可せられた国立公文書館、ならびに、上記複写物交付手続等に関して  
 御高配賜わった愛媛大学図書館それぞれの関係各位に、記して御礼申しあげる。(平成二十七年霜降)